

## 滋賀県湖北地方のコハクチョウについて

仁科久雄・石井光弘

湖北野鳥の会, 529-0365 滋賀県東浅井郡湖北町大字今西

mmcm@trust.ocn.ne.jp

### 1. 湖北地方の概略

湖北とはその名の通り、琵琶湖の北部のことを意味します。地図で見ると滋賀県は内陸部に位置します。しかし、地理上、とくに冬季の北西の季節風が入り込みやすく、日本海側の気候に非常に近いものがあります。冬季の積雪量は近年温暖化の影響でその量は減ったものの、湖北町でも30cm程度は普通に積もります。ちなみに約30年前には平野部でも1mを超えることがよくありました。そのような積雪量の多さからか、県南部に比べ人口も少なく開発も遅れ、豊かな自然が残っている地域でもあります。

### 2. ハクチョウ飛来の理由

湖北町からびわ町にかけての一带は遠浅となっており、ハクチョウの餌となる水草の生育が他に比べて良好です。とくに湖北町の一带は、沖合い500mでも深さ1~3m程です。またハクチョウ類の埒となる浅瀬や小島が点在しています。平野部に目を向けると、水田地帯が広がり、ここもハクチョウの良い餌場となっています。

### 3. 今年度の飛来状況

今年度の飛来状況は、初飛来は10月19日、ここ湖北野鳥センター前に15羽の群が早朝に飛来しているのが確認されました。その時は新聞にも掲載され、冬の訪れが近い事を感じずにはいられませんでした。以降時間の経過と共に順調にその数を増やし11月24日には琵琶湖全体で268羽となっています。

### 4. 湖北のハクチョウ飛来の歴史

昔の詳しいデータは残っていませんが、かつては湖北地方にもハクチョウが来ていたとされています。再び湖北にハクチョウが来るようになったのは1971年で、この年に琵琶湖が全面鳥類保護区とされた事とその大きな理由だと考えられます。そしてついに1977年、33羽が飛来し、それ以降は毎年越冬するようになりました(表1)。



図1. コハクチョウの利用する場所. ○=利用する水域, ★=よく利用する水田.

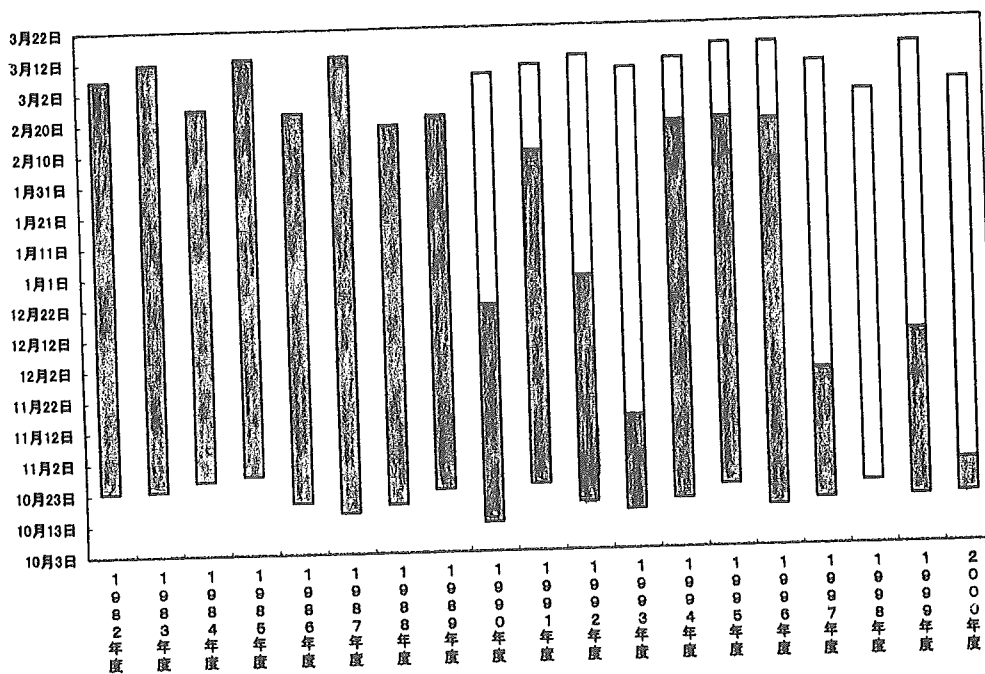


図2. コハクチョウが水田(□)と湖(■)で採餌する期間.

表1. 琵琶湖におけるコハクチョウ渡来数

年度	初認	終認	最高羽数 (年月日)
1977~78			36
1978~79			13
1979~80			9
1980~81			35
1981~82			25
1982~83	10月23日	3月6日	47 (1983年2月9日)
1983~84	10月23日	3月11日	51 (1984年2月25日)
1984~85	10月26日	2月24日	78 (1985年2月11日)
1985~86	10月28日	3月13日	148 (1986年1月15日)
1986~87	10月19日	2月23日	152 (1987年1月4日)
1987~88	10月16日	3月14日	182 (1988年2月27日)
1988~89	10月18日	2月19日	216 (1983年1月13日)
1989~90	10月22日	2月22日	191 (1990年1月16日)
1990~91	10月12日	3月7日	102 (1990年11月18日)
1991~92	10月24日	3月10日	152 (1992年1月5日)
1992~93	10月18日	3月13日	182 (1992年11月30日)
1993~94	10月15日	3月8日	256 (1993年12月2日)
1994~95	10月18日	3月11日	301 (1995年1月21日)
1994~96	10月15日	3月17日	279 (1996年1月21日)
1996~97	10月15日	3月15日	222 (1996年11月30日)
1997~98	10月18日	3月10日	285 (1998年1月14日)
1998~99	10月22日	2月28日	230 (1999年2月28日)
1999~2000	10月18日	3月15日	185 (2000年2月1日)
2000~01	10月19日	3月3日	350 (2001年2月17日)
2001~02	10月19日		268 (2001年11月24日)

### 5. 湖北のコハクチョウの個体数の変化

毎年湖北で越冬するようになった1977年以降のコハクチョウの最高羽数の変化をグラフすると、図1の様になります。1985年に初めて100羽を超え、近年は200羽を超える年がほとんどになっています。

コハクチョウ以外にもまれにオオハクチョウが飛来します。オオハクチョウは飛来するそのほとんどが幼鳥で、2~3年おきに1羽から数羽の越冬記録がありますが、毎年ではなく定着はしていません。

またコハクチョウの亜種アメリカコハクチョウも、数回の記録があり、コハクチョウの群と行動を共にしていました。

## 6. 湖北のハクチョウ類の生態の変化

冬を越すために湖北にやってくるコハクチョウは飛来後、ほとんどの時間を琵琶湖の比較的水深の浅い所で食糧となる水草を食べて生活しています。越冬個体数の少なかった1989年までは琵琶湖から離れることはほとんどありませんでした。しかし、1990年12月、水田で餌を採るコハクチョウが観察されるようになりました。

図2は日中、水田で餌を採る期間を表しています。1990年以降、群のほとんどが水田を利用するようになりました。年によってばらつきはありますが、早い年では10月下旬に水田に飛来しています。朝、琵琶湖を飛び立ち近くの水田に降り、日中水田で餌を採り、夕方に琵琶湖の畔に戻ります。

図3は、コハクチョウが好んで降りる水田の位置を示しています。全ての水田が琵琶湖からそう遠くない所に位置しています。

また旅立ち前には、転作の麦畑に降りその葉を採食している姿がよく見受けられるようになりました。その理由として考えられることは、1) 琵琶湖に餌となる水草が少ない、または個体数を補うだけの水草が無い、2) 水草よりも水田の餌の方が栄養価が高く採餌効率が良い、もしくは餌が採り易い、3) 琵琶湖が釣りブームのため日中レジャーボートが行き交い落ちて生活出来ない、4) 琵琶湖の水位の関係で水位が高い年には、餌が採りにくく、早く水田に上がる、などが考えられます。これは私たち人間の勝手な解釈なので正解ではないかも知れません。本当の所はハクチョウだけが知っている事だと思います。

## 7. 湖北のコハクチョウ保護への取り組み

ここ湖北町では、ようやくコハクチョウが冬の風物詩としてしっかりと根付いて来ました。湖北町は町の鳥をコハクチョウと定め、この野鳥センターを拠点とし一



図3. コハクチョウ保護啓発の看板設置。

般の方にコハクチョウに関心を持ってもらうために地道ながらさまざまな活動や支援を行って来ました。

その例をあげると、

1) コハクチョウが餌場としている水田に、コハクチョウ保護啓発の看板設置。これはコハクチョウが餌場とする水田内に見物客やカメラマンが入り込み、コハクチョウの生活を脅かすことの無いよう呼びかけるための看板を湖北町商工会の協力で設置しました。 2) コハクチョウ飛来クイズの実施。これはコハクチョウがその年の何月何日に湖北に渡ってくるかを予想してもらうクイズです。今年で3回目で年々応募人数が増え、ちなみに今年は1,525名の応募があり、そのうち正解は207名でした。正解者には抽選で景品がもらえます。その景品は湖北町の商店や旅館等の提供によるものです。

3) 「鳥のお話の会」の実施。これは月に1回この野鳥センターで鳥や自然をテーマに絵本の読み聞かせや紙芝居、鳥や自然についての簡単な解説を行っています。参加者が主に幼児とその保護者のため出来るだけわかり易く少しでも興味を持ってもらえるよう、ボランティアの方の協力を得て試行錯誤して行っています。その会でも、コハクチョウが渡ってくる季節になるとコハクチョウをテーマに取り上げています。

4) 劇団モモ2000年公演への協力。劇団モモとは湖北町の子育てに忙しい奥様方とボランティアによって、子供たちの健やかな成長を願い誕生した劇団です。2000年に建てられた文化交流センターの記念事業の一環で、野鳥センターを舞台に少年たちの心の葛藤と優しさを描いた作品「君がくれた翼」を上演しました。心に傷を負った少年たちがコハクチョウを通じてその心を癒していく、と言ったストーリーです。その時のスタッフは150名を超えていました。野鳥センターの職員もその時は脚本監



図4. 劇団モモ2000年公演「君がくれた翼」の一場面。

修として関わりました。その舞台を通じて広く町民にコハクチョウの存在が知れ渡り、コハクチョウへの関心が高まったと思います。

5) 環境教育の拠点として各学校への協力、現在、小学校関係で環境教育の重要性がさげられる中、野鳥センターではその教育の場としての利用が多くなって来ました。とくに冬季はコハクチョウやオオヒシクイ等が教材として取り上げられることが多く、町内の小学生の野鳥への関心は他の地域よりも高いと思います。

## 8. 保護の為の今後の取り組み

琵琶湖は1993年にラムサール条約の登録湿地に加わりました。それにもかかわらず、ハクチョウを含む水鳥達をとりまく生活環境は年々悪化しているように思えます。何故でしょう。琵琶湖は広すぎるため、コハクチョウを初めとする水鳥の生活環境を守るのは難しく思えます。また、滋賀県を始め各市町村が登録湿地の意味をよく理解していないまま加盟してしまっているように思えます。言うなれば、名ばかりの加盟です。今後取り組まなければならないこととして、

1) ハクチョウ保護水域の指定の提言。もっと県内の自然の保護を訴える人々が声を大にして、ハクチョウ渡来地の保護・保全の為の提言をすべきだと思います。琵琶湖全域は無理としても、重要なハクチョウ渡来地の水域はレジャーボート等の乗り入れの規制を敷くよう呼びかける必要があると思います。

2) 日中餌場となる水田の保全。コハクチョウが餌場としている水田は、大体決まっています。そこでその水田の管理者の承諾を得て、ハクチョウの渡来期にある程度水を張り湿田状態にすれば、人間を始めとする外敵の侵入を防げるとともに、良い餌場となると思います。

3) 現在、県では早崎地先において早崎内湖ビオトープ(17ha)のネットワーク調査を行っています。水田を湛水化し、もとの内湖のようにして、生態系、水質系の変化を調査検討しています。このビオトープにもコハクチョウが入り餌を食べている



図5. 早崎内湖周辺ビオトープの看板。

姿を見ることが出来ます。調査段階ではありますが県のこのような取り組みから自然に関心を持つ人が増えることを願い、協力出来るところは協力をして行きます。

4) 自然に関心を持ち守りたいと願う人の育成のきっかけづくり。ハクチョウを見に来られるお客さんの中には、この自然を後世に残したいと願われる方が大勢います。何気なく野鳥センターに足を運んで美しいハクチョウの姿を見て、ハクチョウや自然に関心を持ち、すっかりハクチョウファンになってしまって、毎年渡って来るのを楽しみにしておられる方もいます。思いは人それぞれでしょうが、野鳥センター職員をはじめボランティアが、自然のすばらしさ・面白さ、そして大切さをもっと一般の方に関心を持ってもらうための働きかけを行い、ゆっくりではありますが着実に積み重なり実を結ぼうとしています。

環境問題がさげられる今日、開発に歯止めをかける好機でもあります。是非、みなさんのハクチョウを愛する心で後世に美しい自然を残して行きましょう。